

2023（令和5）年度 東北アジア研究センター共同研究報告書

提出 2024(令和6)年4月15日

代表者 鹿又 喜隆

(本報告書はセンター内外への公開を原則とします)

研究題目	和文) 更新世末から完新世初頭における環日本海の人類の移動と地域適応 英文) Human Migration and Regional Adaptation in the Pan-Japan Sea from the end of the Pleistocene to the beginning of the Holocene			
研究期間	2023（令和4）年度～2023（令和5）年度（2年間）			
研究領域	(C) 移民・物流・文化交流の動態			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	鹿又喜隆	文学・教授	考古学	総括
	崔 笑宇	文学・D2	考古学	調査・分析
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 300000 円 ヨッタインフォマティクス研究センター研究助成 [金額] 200000 円		
	外部資金(科 研・民間等)		[小計]	
	合計金額	500000 円		
研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800 字の間で 専門家以外にも理解 できるようまとめて ください。)	当初予定していた中国東北地方への渡航が出来なかったため、国内の調査を中心に実施した。具体的には、後期旧石器時代の終末に関わる山形県鶴岡市の越中山遺跡の発掘調査と、後期旧石器時代を遡る可能性のある栃木県鹿沼市のタンデンバ遺跡の発掘調査である。いずれの発掘においても一括資料を確保し、考古学的な分析を進めることができた。越中山遺跡では、新潟大学と共同で発掘調査を実施し、白滝型細石刃石器群の貴重な発掘資料を得ることができた。特に黒曜石製の白滝型細石刃核から剥離された細石刃の一括資料を確保でき、それらの黒曜石産地分析ではその多くが秋田県男鹿産であることが判明した。本研究では白滝石器群の年代の解明をひとつの目的としていたが、薄い不安定な堆積層であり、複数時期の資料が層位的にも混在する状況であったため、妥当な放射性炭素年代が得られなかった。また、タンデンバ遺跡では後期旧石器時代を遡る可能性のある資料が指標的な火山灰に挟まれた状態で検出された。現在は、それらの火山灰を同定中であるため、具体的な年代の特定には至っていない。出土資料についても二次加工のあるツールがないため、剥片・碎片・礫の内容であり、石器群としての評価が難しい。使用石材もチャートと砂岩であり、立地する丘陵の基盤に含まれる在り岩石が利用されているため、搬入石材を含んでいないため、外部から持ち込まれた石器と評価することもできない。しかし、いずれの遺跡も 2024 年度に継続調査を計画しており、それによって日本列島の旧石器時代編年の確立に向けて課題となる年代を特定したい。			
本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	越中山遺跡の資料は東アジアに共通する細石刃石器群であり、北方からの南下に関わる。出土した黒曜石は秋田県男鹿産が中心であり、南下後に一定期間において定着した集団の行動を反映している。タンデンバ遺跡は国内で稀な後期旧石器時代を遡る可能性のある遺跡であり、年代の特定と資料の分析結果を待って、東アジアの中で評価していきたい。			
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など	0 回	国際会議	0 回
	研究組織外参加者(都合)	人	研究組織外参加者(都合)	人

研究成果	学会発表 (2) 本	論文数 (0) 本	図書 (1) 冊	
専門分野での意義	[専門分野名] 考古学	[内容] 考古学に新資料をいたらし、1件は発掘調査報告書を刊行した。		
学際性の有無	[有]	参加した専門分野数: [1] 分野名称 [火山灰]		
文理連携性の有無	[有]	特筆事項: 都立大の鈴木毅彦教授による火山灰分析		
社会還元性の有無	[無]	[内容]		
国際連携	連携機関数: 0	連携機関名:		
国内連携	連携機関数: 2	連携機関名: 新潟大学、都立大学		
学内連携	連携機関数: 0	連携機関名:		
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数: 4	参加学生・ポスドクの所属: 文学		
第三者による評価・ 受賞・報道など	なし			
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	当初計画の中国東北地方の訪問がかなわなかったため、研究目的が達成できたわけではないが、研究計画達成のための参照すべき基準資料を国内で得ることができた。特に北方系の「白滝型」細石刃石器群の確実な発掘資料を確保した意義は大きい。また、今後の課題ではあるが後期旧石器時代を遡る可能性のある資料を確保できたため、広い時間幅での検討が可能となった。今後は、より広域的な比較を実施し、製作技術の類似性のみならず、石器の使用や消費、再利用、石材獲得行動を含めた人類の活動レベルの比較を実施したい。			
最終年度	該当 [無]			

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

Yoshitaka Kanomata 2023.06.06. Technical and functional relationship between Hirosato-type microblade core and burin in northern Japan. International Obsidian Conference (in Engaru, Hokkaido)

崔 笑宇・青木要祐・結城 駿・野村郁仁・松本航太・廉 禱・鹿又喜隆・森 貴教 2023.12.17. 「山形県鶴岡市越中山遺跡 2023 年度発掘調査」 第 37 回東北日本の旧石器文化を語る会

[雑誌論文]

崔 笑宇・青木要祐・結城 駿・野村郁仁・松本航太・廉 禱・鹿又喜隆・森 貴教 2023 「山形県鶴岡市越中山遺跡 2023 年度発掘調査」 『第 37 回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』 pp.67-76

[その他]

青木要祐・鹿又喜隆編 2024 『越中山遺跡の研究—2023 年度発掘調査報告書—』 越中山遺跡調査団

*ファイル名は KyodoRpt_年度_代表者ローマ字とする。二つある場合、代表者名の後に 1, 2 と記入する（例 KyodoRpt_2013_oka1）。